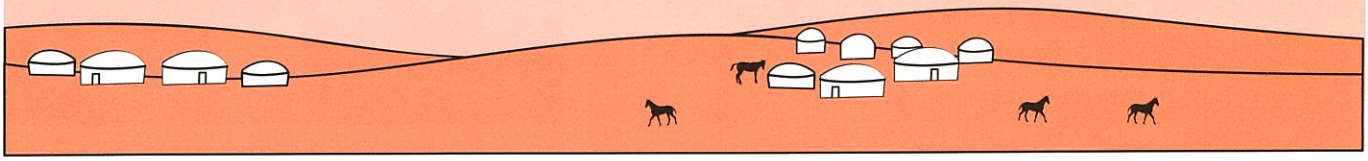
NPO法人子どもセンター「パオ」ニュースレター　発行:子どもセンター「パオ」事務局　発行日:2011年2月1日

NPO法人 子どもセンター パオ

NewsLetter

vol.15

シェルター「丘のいえ」だより⑪ ●
児童虐待防止学術研究集会リポート ●
事務局から「ステップハウスを始めます!」 ●



パオの現(いま)在

シェルター「丘のいえ」だより⑪

素敵な出会い

虐待を受けた子どもたちと関わっていると、子どもを縁に素敵な「出会い」に出会えることがあります。昨年「丘のいえ」にやってきた子は、私たちに二つの「出会い」をくれました。

一つ目は彼女が幼少期から過ごしてきた児童養護施設。

現在もたくさんの子どもたちを預かっているだろうに退園して数年経つ彼女を心配して、何度も足を運んで下さいました。帰る「家」のない彼女にとって、唯一帰ることのできる場所がその施設と職員さんなのでしょう。出過ぎることもなく、「何かあれば助けになるよ」と一歩下がったところで見守っているその姿勢が、パートナー弁護士として自分もあのようになりたいな、と思わせられるものでした。

二つ目は彼女の旅立ち先となった職場。

次の居場所を見つけるため、私たちはハローワークに一緒に行って、職探しをすることもあります。

ただ、「丘のいえ」に入る子どもたちの多くは、高卒資格や運転免許を持たず、しかも住み込み希望ということで、職探しは困難を極めます。条件に合うところでも、子どもたちの事情を知ると面接すら断られるということも。そのようなときは、家族から逃げて来た子どもたちの目の前で世間の冷たさを見せつけるようで、いたたまれません。面接すら断られ続け、希望に満ちた顔がどんどん曇っていく子の横で、なんと声をかけてよいのかわからなくなったこともありました。

今回も、私は面接すら断られるかもしれない、と思っていました。余計な期待を抱かせないよう、彼女にもその旨を伝えてハローワークに向かいました。

ハローワークで、彼女の条件にあった求人を探すと、なんと、たったの三件。これは、全滅かもしれないな…という不安を抱えながら、三件の中から彼女が選んだ第一希望の会社に面談の希望を伝えました。すると、その会社は、これまでも児童養護施設で育った子を受け入れたことがあること、勤務するのであれば資格取得を目指して自立できるよう頑張って欲しいということで、とんとん拍子に話が決まり、なんと数日後には、彼女は「丘のいえ」から新しい生活の場へと旅立つことになりました。

私たちパートナー弁護士と、児童養護施設の職員の方とで彼女の就職祝いの食事会をし、彼女を送り出すことにしました。私は、食器を彼女にプレゼントしました。もう１人のパートナー弁護士からは目覚まし時計。虐待の傷から「丘のいえ」でも不安定になることの多かった彼女でしたが、このときは穏やかな時間を過ごすことができ、彼女にとっても、私たちにとっても幸せなひとときでした。

彼女は、会社でもたくさんの理解ある方に「頑張るんだよ」「何かあったらすぐ相談するんだよ」と声をかけられ、勤務地に旅立ちました。

一番大切な存在であるはずの親から裏切られ、傷つけられ、社会からも簡単には受け入れてもらうことのできない彼女たちですが、このような出会いを通じて、人の暖かさを感じられるのだろうと思います。そして、私たちも彼女たちの笑顔や彼女たちのおかげで得た「出会い」を通じて、また新たな子どもたちと向き合って行く力をもらっているのだと思うのです。(まみやしずか)